

辻川界限

柳田國男・松岡家顕彰会会報 第2号



第26回山桃忌記念松岡家生家にて（平成17年8月7日）

前列から向かって左五人目から講師・伏見暢子先生、河合かつみ、柳田富美子、松岡章子各氏

柳田國男先生と松岡静雄先生

（助）柳田國男・松岡家顕彰会

理事 鎌谷嘉道

柳田國男先生の五兄弟が揃って、それぞれの分野で優れた業績を残されたことはよく知られています。その中でも、特に第三子であった柳田國男先生と三歳下の松岡静雄先生のお二人は、ともにずば抜けた秀才で、お互いに刺激し合いながら競い合っており、当時全国から秀才が集まるところであった東京帝国大学と海軍兵学校を優秀な成績で卒業し、國男先生は三十八歳で貴族院書記官長になられ、静雄先生は、三十九歳で海軍大佐にまで昇進されます。しかし、その後とはともに四十歳半ばまでに退官し、独力で柳田國男先生は日本民俗学を創始し、松岡静雄先生は、南洋の仕事に従事されたあと、日本書紀や古事記や万葉集を研究して、「日本古語大辞典」語誌篇、訓話篇の大著を著されました。

後進の指導に力を尽されたことも両先生に共通の大きな業績として忘れることができません。日本各地の庶民の生活資料の収集などを通して、柳田國男先生の日本民俗学の組織の裾野は全国隅々にまで広がっていきました。

また海軍を退役し、神奈川県鶴沼に転居して学問の研究と学術的な文筆活動に入られた松岡静雄先生は、同時に貧しい学生を集めて、神楽舎（ささらのや）と名付けた自由な私塾を開かれますが、ここからも多くの俊秀が輩出したのでした。

今年八月七日に開かれた山桃忌では、松岡静雄先生の孫にあたる伏見暢子先生が「松岡静雄の生涯」（別掲）についてお話し下さいました。

松岡静雄の人と素顔

伏見暢子

幼少の頃の静雄は、一言で申せば読書にふける子供でした。四歳の時にはもう百人一首を暗唱してしまっただといわれます。六歳の時、中国の歴史書「史記」を与えると、三日間ならんで、四日目からは「糸のほぐるが如く」読み解いた、と伝わっています。言葉についての感性の鋭さは天性のものだったようで、後年、十六カ国語を理解し、一つの外国語を習得するには三カ月で十分だと豪語していたそうです。

十二歳で関東の長兄の鼎の所に身を寄せてからは、転校したはずの小学校にもろくに通わず、中学校も二カ月ぐらいで辞めてしまい、どうもレベルが低過ぎて面白くないと家で



読書に耽ってばかり、独立独歩、ほとんど独学に近い状態で、これといふほどの正式な秩序だった学校教育を受けないまま成長しました。たまたま海軍兵学校が、今までより多く三十名近く募集すると聞き、ただで勉強出来るならと誰にも相談せず独学で受験し、見事に難関を突破して合格。しかも卒業する時には首席で、天皇から恩賜の御物（短剣）を拝受しております。

海軍に入って、最初にドイツに注文した軍艦を受け取りに行く時、艦長から政治、外交、社会問題など、多方面にわたる分析力の必要性を懇々と教えられ、初めて「多角的な思考の重要さ」に目を開かされたそうです。

二十五歳で巡洋艦「千代田」の航海長となり、折からの日露戦争では仁川沖の海戦をはじめ緒戦から活躍、兵学校当時の成績も抜群でしたし、「自負すること甚だしく、時に僭越の行為あり」と祖母も書いていますが、時には大先輩である島村速雄参謀長から「貴公より頭の良い人が世にあ

ることを知らぬか」と諭され、強く反省したこともあったそうです。

戦後、三十二歳の時には、オーストラリアに大使館付き武官として駐在し、時のフランシス・ヨーゼフ二世皇帝にも拝謁、ただ、無骨な静雄は舞踏会が苦手な困ったそうです。

大正三年、三十七歳の時の第一次世界大戦では、出征直前、わが家に立ち寄り、「これから戦争に行くが、遺書は書かぬ。私の心は書かずとも君には判っている筈だから」と妻の初子に言い残して出て行ったと言いがいかに強かったかを物語る挿話だと思えます。

そしてまず、当時ドイツ領だった南洋諸島占領に参加、最初にポナペ島に上陸しますが、島民に慕われてる宣教師の姿から、統治するには、その島の人々の習俗を理解することが、まず何よりも大切だと気づき、静雄は、つとめて島民の言語を習得し、風俗を理解しようとしていました。当時の南洋はヨーロッパ列強諸国がさかんに植民地化していた時代でしたが、静雄は日本の南方進出を夢見ながらも、それがヨーロッパ列強諸国のような苛酷な植民地政策——島民からの搾取——ではなく、現在、島民

が置かれている厳しい現状を、いかに理解し生活状態を改善していくか、今で言う島民への福祉という視点が静雄にはあったようです。が、おりもおり病に倒れ、いったん日本に戻り、軍の閑職に回り、ついで海軍を退役してしまいました。

大正三年、四十一歳、改めて南方進出を実現しようと「日蘭通交調査会」なるものを設立します。たとえ私財をなげうってでも、こうした民間外交で、当時、南洋に多くの植民地を抱えていたオランダとの友好関係を築くことが日本の南方進出に役立つと考えたのでしよう。裏には兄の柳田國男から「向こうも交流したがつているぞ」といった情報もあったようです。

たまたまそのような時に、長男の磐木（いわき）が誕生しましたので、「人のため世のため尽くせあしひきの深山（みやま）の磐木身を砕くとも」と言う歌を詠んでいます。人々のためにいかに奔走するか。それが当時の静雄にとって、いかに大きな命題だったかが、この歌からもよく判ります。

まず南洋に調査船を出し、オランダの財界人や芸術界の人々などとの間に、さまざまな交遊の機会を作っ

て活動を続け、その功績に対して、時のオランダ国女王から勲章を贈られていきます。また必要に迫られて蘭和辞典の編纂などもしております。

新渡戸稲造、新村出、原敬、加藤高明、後藤新平、牧野伸顕、斎藤実など多くの政財界の人々の応援もあり、計画は順調に進んでいました。が、不運にもたまたま関東大震災が起り、そのうえ、本人も脳溢血で倒れるなどのために、途中で頓挫してしまします。

歩行も不自由になって、柳田國男の言葉を借りると「だれもが引退だろうと思っていたら、病を得てからは学問のために生まれてきたような顔付きをして」今度は一変して学者としての生活に入りました。

まず最初に南洋庁の長官を通して、島に駐在している官僚の方々の協力も得て「ミクロネシア民族誌」「マーシャル語の研究」など、南洋群島の民族や言語に関するものを次々と出しております。

次に日本の古語や古典に興味を持ちその分析をいろんな角度から始めました。もともと特に日本の古典に詳しいわけではありませんし、とにかく独学ですので、柳田なども「独創性は認める。しかし独学であるが

ゆえに間違っても、それを指摘してくれる先生がいなかった」と評しています。しかし、また一方で、最初に出した「ミクロネシア民族誌」を見ると、大変客観的な内容だったので、弟が学者としてやっていくことに安堵感を持ったそうです。

この頃は一日に三十枚の原稿を書くという生活だったようです。若いときは自負心が強過ぎるほどの人でしたが、病を得てからは、人に対して誠実になったと言うか丸くなったと言うか、ごく自然体で周囲の土地の農家や漁業を営む人々に対しても喜んで迎え入れ、特に学生や若者を心から愛して、その来訪は清濁の区別なく受け入れ、集まった若者同士が勉強しあう空間を提供して、それに神楽舎（ささらのや）と名付けていました。

このおらかな若者たちを、愛しはぐくむ見事な生き方は子供心にも大変魅力的だったのでしょう。長男の磐木をはじめ、子供たちすべてがしっかりとその生き方に感化されたものでした。

静雄はウイスキーが大好きで、つねづね「末期の水はウイスキー」と言っていたそうです。そんな静雄のことを、妻の初子は「一徹にして独

立独歩、所信に邁進する様な壮観なりき」と評し、兄の柳田は「五十九歳の、短いが充実した人生を過ごした男だった」評しています。

葬儀には天皇家から勅使がお見えになり、神楽舎に出入りする学生や若者達はもちろん近隣の農家や漁師の方々も参列して別れを惜しんで下さったそうです。

松岡静雄氏 略歴



- 明治11年5月1日誕生
- ◇ 28年（18歳）海軍兵学校入学
 - ◇ 30年（20歳）同校首席で卒業。海軍少尉候補生となる。
 - ◇ 32年（22歳）海軍少尉八雲乗り組み。ドイツ派遣
 - ◇ 35年（25歳）海軍大尉・千代田艦航海長
 - ◇ 37年（27歳）朝鮮・仁川沖でのロシアとの海戦に参加
 - ◇ 39年（29歳）日露戦争功五級金鵄勲章授与
 - ◇ 40年（30歳）海軍少佐・オーストリア 国大使館付

- 大正3年（37歳）第一次世界大戦時、筑波艦副長・南洋群島防備隊参謀
- ◇ 4年（38歳）海軍軍令部出仕、海軍省文庫主管（日独戦役編集長）戦功により勲三等旭日中授賞授与
- ◇ 5年（39歳）海軍大佐・従五位（宮内省）
- ◇ 7年（41歳）海軍を退役（特旨をもって正五位に昇進）日蘭通交調査会設立（理事）蘭語文法書著述
- ◇ 8年（42歳）3月〜9月英仏和蘭へ赴く（日蘭通交親善のため）
- ◇ 9年（43歳）蘭領東印度に赴く。和蘭国女王より勲章を贈られる。
- ◇ 10年（44歳）「和蘭語辞纂」編纂
- 昭和2年（50歳）「ミクロネシア民族誌」「ミクロネシア語の総合研究」「マーシャル語の研究」等々※（南洋民族南洋語の研究）

- ◇ 4年（52歳）日本語大辞典・日本語族史※（日本語古俗の研究）
 - ◇ 7年（55歳）記紀論稿十四巻を執筆。※湘南国語研究会を結成於・藤沢市の鶴沼の自宅神楽舎（ささらのや）
 - ◇ 11年（59歳）5月23日、神楽舎（ささらのや）にて永眠―没年59歳
- ※主な著書 四十数冊
 ※傑出した軍人
 ※語学の天才（晩年の白髪は「かつら」）

館だより

伊勢の大神楽



▲伊勢の大神楽

天照皇大神のご神徳をえて、神楽舞で、火神を鎮め、四方のお祓いをし、家々の繁栄村々の繁栄をお祈りします。

本年も神楽(獅子舞)は柳田國男・松岡家顕彰会記念館が主催し、当日第一に辻川区氏神、鈴の森神社で奉納の舞、次に柳田國男と兄弟の生家を祈り清祓いをし、記念館前庭で獅子舞を納めてもらいますので多数參觀に来て下さるよう御案内致します。

記

日時 平成十七年十一月十二日(土)

午後一時三十分から

場所 (財)柳田國男・松岡家顕彰会記念館前庭

入場料 無料

※雨天の場合は翌日の日曜日

岩田健三郎版画教室

版画家、岩田健三郎先生の指導で、年賀状の教室を開きます。友人お誘い合せ参加下さい。

日時 平成十七年十二月十日(土)

午後一時三十分から

場所 (財)柳田國男・松岡家顕彰会記念館

費用 材料代 一枚 百円

持参品 筆記用具 彫刻刀持っておられる方は持参して下さい。

彫刻刀をお持ちでない方は申出て下さい。

申出下さい。

申込先 (財)柳田國男・松岡家顕彰会記念館

※小学生の低学年の方は保護者と共に参加して下さい。

そば打ち体験教室

日時 平成十七年十二月十日(土)

午後一時三十分から

場所 (財)柳田國男・松岡家顕彰会記念館

講師 神河町東柏尾・坂田篤彦氏

費用 三百円

寄贈者と受贈品(敬称略)

松岡 喬 松岡静雄著 十七冊

紀記論究 望遠鏡 一品

マーシャル語の研究

中央カロリン語の研究

バラク語の研究

松岡道男

井上通泰より映丘への書軸一幅

井上通泰より陵王の歌を弟映丘に贈った品

伏見暢子

松岡静雄が日露戦争の時

千代田艦より兄柳田國男に出した手紙

鎌田久子

柳田國男の手書写本

三木雅雄

井上通泰/今様歌

南天莊雜筆

南天莊集

井上通泰文集

柳田國男/民謡覚書

妹の刀

故郷七十年

日本の昔話

神道と民俗学

松岡静雄/有田縁歌の防人歌

松岡映丘/画帳

絵巻物小釋

映丘一門華麗なる巨匠展

映丘画集三冊

本 十四冊

はがき集コピー

永富家本他十点

※資料を受贈し、誌上を借りて厚くお礼申し上げます。

編集後記

記念館の建設いらい三十年の年月が経過して屋上より大雨の時には雨漏りをするようになり、その修理をしなければなりませんので、本年より皆々様に御無理を申し、浄財を年積立て一日でも早く雨漏りの修理を致したく、去年に引きつづき、今後御無理申し上るしだいです。

本年も振込用紙を同封致しておりますので浄財をお願い致します。

本文松岡静雄の人と業績をお読みいただくと松岡家の五兄弟の偉大さが少し知っていただいたと思います。

※表紙題字(辻川界限)は版画家・岩田健三郎先生の直筆です。

(財)柳田國男・松岡家顕彰会記念館

〒六七九-二〇〇四

兵庫県神崎郡福崎町西田原一〇三八-二二

TEL 〇七九-〇二二-一〇〇〇〇

休館日 毎週月曜日と祝日の翌日
入館料 一般 二百円 小人 一百円
開館時間 午前9時30分〜午後4時30分